

氷原の旅

瓜生卓造

FOR BOYS AND GIRLS



氷原の旅

瓜生卓造 作

中村勝美 画

少年少女学研文庫

913 瓜生卓造
(NDC)

氷原の旅

学習研究社 昭和47(1972)

306P 図 19cm

(少年少女学研文庫407)

検印廃止

8193-738 907-1002

少年少女学研文庫407

氷原の旅

著 者・瓜生卓造

発行人・古岡秀人

編集人・石井和夫

印刷所・信毎書籍印刷株式会社

・株式会社美術版画社

製本所・有限会社黒田製本所

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

振替 東京142930

©1972

4701

この本についてのお問い合わせ、製本上のミスなどがありましたら、
下記あて文書または電話でお知らせください。

学研 ユーザー・サービス本部事務局「児童図書係」

東京都大田区上池台4-40-5 〒145 Tel.03-727-1600

氷原の旅

瓜生卓造 作

中村勝美 画



少年少女学研文庫

著者紹介

1920年、東京に生まれる。早稲田大学政経学部卒業。小説家。おもな著書に『単独登攀』（朋文堂）、『流水』（雪華社）、『八郎潟』（講談社）、『雪山の果て』（学研）、訳書に『地のはてにいでむ』（学研）などがある。

装丁

堀内誠一



もくじ

極点^{きょくてん}への誘惑^{ゆうわく} 7

雪と氷と夢 41

南方航路 63

フラムハイム 89

ながい暗黒 117

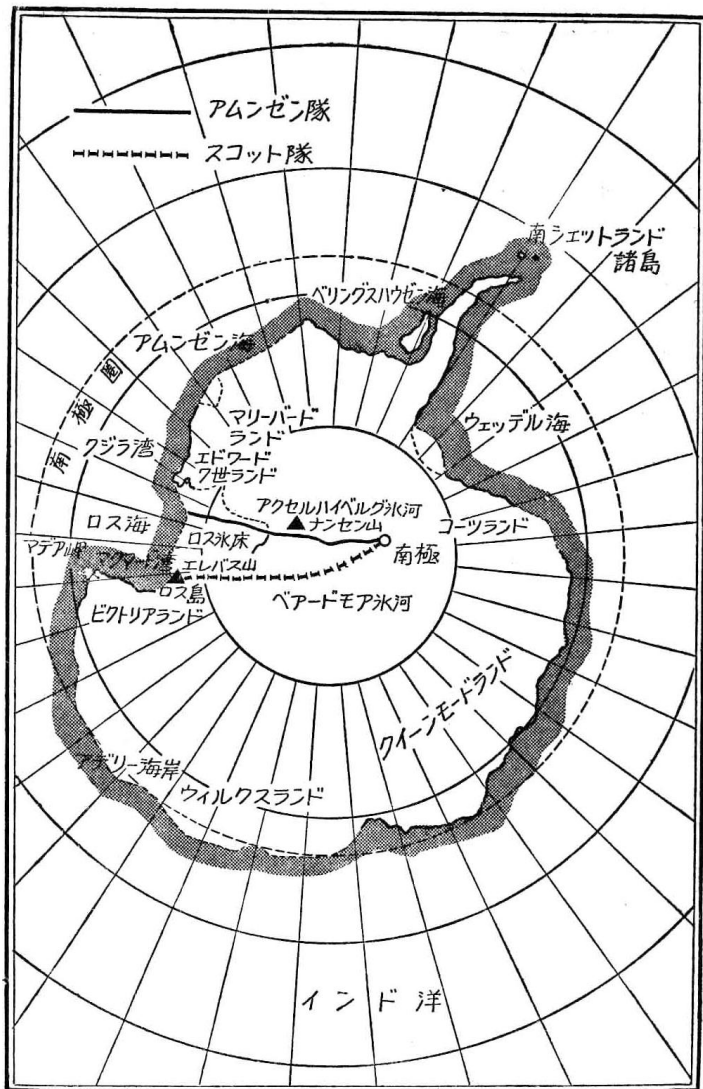
人類の栄光 144

消えさった夢 207

めぐりあい 226

雪あらし 256

*あとがき 298



極点きょくてんへの誘惑ゆうわく

十二月になると、南極にも夏がおとずれる。

ま夜中、太陽は地平線近くに大きな円弧えんこをえがきながら、しずむこともなく、正午しょうごにはまたゆっくりと頭上に帰ってくる。

太陽が高まるにつれて、地をおおう白雪は水けをふくんでいく。

山稜さんりょうはところどころ土はだをあらわし、岩かげにはわずかな地衣類ちいりがにふい色を見せたりする。しかし、いっさいの草木は生育せいいくせず、文字どおり死の大陸である。

こんな陸上りくじょうに比ひして、海上はいともにぎやかである。

巨大きょだいなクジラたちは、えさを追って氷海を遊泳ゆうえいし、そちこちでなまぐさい潮柱しほばしらをふきあげ、アザラシは浮氷ふひょうの上でめぐみすくない極地の陽光をあび、ラッコは氷のすきまからずるそうな首をもちあげる。そして、おどけもののペンギンたちは、奇声きせいを発しながら雪と氷の海にたわむれる。

かれらの集団は、よたよたとなぎさまで走り、海をのぞきこんで二の足をふむ。勇かな一

羽が、海の中に飛びこむ。かれがオットセイのえじきにならないのを見きわめてから、集団はつぎつぎと水にはいっていく。しかし、最初の一羽がぎせいになることもおおいのである。

かれらはこういう、かつ、な一面をもっている反面、きわめてお人よしで、また鳥類の中の精薄児でさえある。かれらの頭脳は、いまだに祖先発生のおかげからたいした改良もくわえられていない。犬や人間を見たこともなく、友だちとも思うのか、大いそぎでかけよって、凶暴なエスキモー犬のえじきになることもしばしばであった。

しかし、夏とはいえ、ひとたびおそろしいブリザード（雪あらし）が荒れると、気温はたちまち零下三十度までも降下し、五〇メートルの狂風にまいあがる漂雪は、ほんの二、三メートルの視界をもうばってしまふ。

南極大陸は、南緯六十七、八度線にかこまれて、地球の底に横たわる広大な陸地である。

面積は一三六〇万平方キロ、ヨーロッパ全域とアメリカ合衆国とをあわせた広さにほぼひとしく、極心はだいたい三〇〇〇メートル近い高原にある。年間の平均気温は零下四十度をしめし、三〇〇メートルという狂風がたえず吹きまくり、内陸にはバクテリアの生存さえもゆるされないときく。世界の氷雪の九十パーセント以上はここに集まり、地をおおう氷盤の厚さは、ときに一九〇〇メートルにも達し、もしも南極の氷がすべてとけさると仮定すると、世界の海面は八〇メートル上昇すると計算されている。



コロンブスが、アメリカ大陸を発見したのは、一四九二年のことであった。このころから、ヨーロッパの人々は、南方洋上はるかに横たわる未知の大陸を頭にえがいた。

北半球に住むかれらは、南といえばあたたかいところと考えていた。まぼろしの大陸は、氣象温暖、物資の宝庫のように思われた。しかし、だれひとり、この大陸を見たものはなかった。むろん到達したものはない。ただ人間の未知に対する夢とあこがれであった。

一五二〇年、ポルトガル人マゼランにひきいられた探検隊の人々は、南米の突端をめぐる航海から帰って、この大陸を見た、と発表した。

ヨーロッパの船乗り、冒険家たちは色めきたった。われこそは南極大陸の一番乗りにならないければならない——当時海運国としてさかえていたスペイン、オランダ、ポルトガル、またイギリス、イタリアなどといった国々のおおくの船が新大陸をもとめて南へ南へと航海していった。しかし大陸はふたたびまぼろしの中にかくされてしまった。

五十年がすぎて、イギリス人ドレークは、マゼランにつづいて世界一周の航海をなしとげた。このとき、かれはマゼランが発見した南極は、じつは南極大陸ではなく、南アメリカ突端の島であることをたしかめて帰ってきた。

南極はまた厚いベールの中につつまれてしまった。

大陸もさることながら、それにいきつくまでの航海が難事であった。どこからまわっても南緯四、五十度付近の海は、たえず荒い波にさらされていた。あらしの海、魔の海とよばれ、ここを乗りきることは、当時の装備や航海術では、ほとんど不可能に思われた。そして一世紀半がすぎた。

一七三八年に、フランス人ブーベは、あらしの海の強行突破に成功して、氷海上はるかに南極の島のひとつを望見した。人類は南極圏ではじめて陸地を見たのである。しかし、氷の海にさえぎられて、陸地に近づくことはできなかった。

南極発見は時間の問題に思われたが、また四十年がむなしくすぎてしまった。一七七二年、偉大なるイギリスのキャプテン・クックは、イギリスを船出し、ケープタウンから南に船を進めた。かれは魔の海にたくみに船をあやつって、南氷洋ふかくはいりこんでいった。氷にはばまれていったん北に帰り、さらにニュージーランドを基地にして、三年にわたって南極を攻めつづけ、幾多の島や陸地を発見、ついには海岸線を一周することに成功した。

この航海でクックは、南極が非常に寒冷な地で、富や資源とは、まったく関係のないことを証明することができた。

このころから、南極におおくの航海者がはいりこむようになった。

一八一九年には、イギリス人スミスは南シェットランド諸島を発見し、またおなじ年にブラ

ンズフィールドは、一部の海図を作成し、大陸周辺の事情が、しだいにあきらかにされていた。

一八二三年には、ジェームス・ウェッデルは大陸の東側おくふかくいこんだ海に船を乗り入れ、南進の記録をたてた。湾はウェッデル海と命名された。先年、イギリス隊の大陸横断の出発点となったところである。しかし、おおくの人々はウェッデルのことばを信じなかった。南極大陸にそんなにおくふかくはいりこんだ湾はない――。

しかし、クックの証言とかれにつづく幾多の探検の成果にもかかわらず、おおくの国々も人も、やはり南極を富の対象として考えていた。

もっともクック自身も、わかいらろながく雑貨屋の徒弟をしており、みずから富に無関係といいながらも、目ざとく海のさちに目をつけてもいた。

クジラ、オットセイ、ラッコなどの海獣を追って、おおくの航海者がはいりこんでいった。とりわけアメリカが熱心のものであった。

やがて一八四一年がきて、ジェームス・クラーク・ロスの登場となる。南極の最大の功労者である。ロスはイギリス政府と国民の強力な支持を受け、テラー、エレバスの二せきの砲艦を指揮して南極に向かった。探検の目的は南磁極の発見にあった。ロスは先年北磁極を発見してお

り、政府としても当然な人選であった。

ロスは氷海を乗りきって、ウェッデル海と反対側に船を進めていった。やがて大きくくいこんでいる湾頭わんとうに到着とうちやくした。かれはウェッデルの南進の記録をうちやぶりながら、さらに湾内ふかく航海し、ひとつの小さな島に上陸した。

南磁極は島ではなく、大陸内のどこかにあるにちがいがなかった。いま一度船に帰り、ロス海沿岸えんがんに上陸地点をさがしていった。船首を南に向けていくと、前方には一大氷壁ひやうへきが立ちだかっていた。ロスは氷壁にそって氷の海をぬっていった。氷の絶壁ぜつぺきが白くかがやいて、壮大な景観けいかんであった。絶壁は高く垂直すいちよくにそそり立って、どこも人間を拒否きよひするすがたであった。かれはその氷壁のむこうに、火をはく山を発見して、異常なおどろきに目をみはった。しんぼう強く航海をつづけたが、上陸地点はどこにもなかった。やがて、おびただしい浮氷群うひようぐんにわざわざされ、南緯七十六度二十三分で船を返したが、前世紀以来の人類南進の記録を大はばにうちやぶった。かれはここをロス海と命名した。

ロスは考えた。もし人間が氷壁のどこかにとりつくことができれば、上の氷原は平たんであり、南極への道が開かれるだろう——と。南磁極の発見こそならなかったが、ロス海、ロス氷壁ひやうへき、そして南極への道に示唆しそくをあたえたかれの功績こうせきは、南極探検史上もっとも大きなもののひとつとなった。

ロスの見とおしは正しかった。海がはいりこんでいるために極心へのきょりが近く、前世紀末以来、極争覇に活やくしたおおくの探検家たちは、いずれもロス海上のどこかにかれらの基地をもとめていた。

一九一〇年、南極の勝利者アムンゼンは氷床の東側に、おなじ年、悲劇の主人公スコットは西側の小さな島に、それぞれの基地をもうけた。その小さな島、ロス島は、スコットの名とともに、南極でもっとも古典的などころとなっている。

島の中央には標高四〇六九メートルのエレバス火山がそびえ、秀麗なコニーデ型の山容からたなびく黒煙が、死の世界ただひとつの生物のようにあたたくなくながめられた。いうまでもなく、かつてロスが目を見はった活火山である。

一八八二年から三年にかけては第一回の国際地球観測年の行事がおこなわれた。九五年には国際地理学会があり、ロスの発見とあいまって、南極への関心はいやがうえにも高まっていた。

アメリカ、ドイツ、ロシアなどの探検隊が南極でさまざまな成果をあげたが、極の制海権は完全にイギリスがぎゅうじるところとなった。クック、ロスの名はあまりにも偉大であり、また未知の世界の探検にかけて、イギリス人はまことにしつようであった。ユニオン・ジャック